

第3回丹後地域における府立高校の在り方懇話会（概要）

- 1 日 時 平成28年6月8日（水）午前9時30分～午後0時05分
- 2 場 所 アグリセンター大宮 多目的ホール
- 3 出席者 26名
府教育委員会 川村指導部長、中島担当課長、
山本丹後教育局長、堀田丹後教育局次長 ほか
- 4 概 要
 - (1) あいさつ
 - (2) 出席者紹介
 - (3) 資料説明
 - (4) 意見交換（主な意見）

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行
・：欠席者意見（事前に聴取した意見を進行が紹介）

- 基本的な考え方のうちⅢの学舎制について、府内・外においてこのような方式を導入している高校の例があれば教えてほしい。
- ◆ 例えば、岡山県においては校地制と呼称されているが、生徒数減少を背景とした県の再編計画に基づき、県立落合高校と久世高校が統合され、落合・久世の二つの校地を持つ県立真庭高校が平成23年4月から設置されている。
また、府立高校としては、府南部地域において八幡高校と南八幡高校を京都八幡高校として統合し、それまでの設置学科の改編を行うとともに、それぞれ元の高校校舎を北キャンパス、南キャンパスとして活用しているところである。
- 子どもの数が減ることは厳然たる事実でありやむを得ないことだが、他地域から子どもたちを集める方策を考える必要がある、という話もあった。良い例が海洋高校であり、丹後地域の子どもの数は少ないが、他府県や地域外から多くの子どもの来てくれており、京都府の高校でありながら全国の高校でもあるという位置づけである。今回の議論において、他地域からの子どもを呼び込む「魅力ある高校づくり」の観点はどのように捉えているのか。
- ◆ 具体的な教育内容をどうするかについては今後の検討としているところである。他府県・他地域から生徒を呼び込む魅力ある高校教育をどう展開するのかについては一つの大きなテーマであると考え。しかし、他地域から呼び込めたとしても、子どもが減っていく現状を完全に打破することは極めて困難であるので、今回の資料を提示させていただいているところである。
- 学舎制を基本にしているという説明であったが、何年後に実施しようと考えているのか。また、教育内容については今後の検討とのことだが、ある程度具体的な構想、もしくは例示でも良いので考えていることがあるのであれば示してもらいたい。
- ◆ 高校の在り方に係る方向性については今夏に示したいと考えている。方向性を示してから、より具体的に検討していくことになるため一定の年数もかかる。これまでから制度の見直しなどを行う場合は、対象者が中学2年生の時点で一定の

絵姿をお示しすることとしている。実施年度については、もう少し検討した後に固めたいと考えている。

- ◆ 前回までの御意見を踏まえると、中学生の中には、早々に希望進路を決めて専門学科を目指す生徒もいるが、多くの生徒は普通科志向で、普通科に進んでからその先の進路を考えていくとのことであった。大学等への進学率が高くなってきている中では、普通科への進学がまず念頭に浮かぶというところだと思われる。したがって、普通科については、与謝・丹後地域全体をみて、どこからでも通えるようにすることを基本として設置する必要があると考える。

一方で、地域産業の担い手を育てていくことも高校教育の大きな使命であるため、海洋高校のほか、久美浜高校の総合学科においては農業や福祉に取り組んでおり、網野高校には商業系の学科、宮津高校と峰山高校には工業系の学科、弥栄分校には農業・家政科がある。こうした既存の専門学科の資源を活かし、さらに教育内容を充実していくような展開を考えていくべきだと思っている。

それぞれの学科については、再編を進める中で一番適切な学校に設置していくべきだと考えている。大きな枠組の方向性についてある程度皆様と意思を一つにしてからでないと、具体的な教育内容に議論が展開しないと考える。今ある資源を活かしながら、新しい教育内容を追求していきたいと考えている。

- 地域の将来を支える人材を育成していくことや地域社会の活性化への貢献が大きなポイントだと考えている。しかしながら、今現在、それが実現しているかというところはなっていない。今の社会がなぜこうなったのかということをしっかり受け止める必要がある。

多くの民間企業の経営者から、「人材がない」「就職してくれない」といった悩みを聞いている。一方で、地域の方からは、「働くところがない」という声があがっており、完全なミスマッチが生じてきている。

中学校までは地元と密着した教育を行い、子どもたちが地域の祭や行事に参加し、地域に対する認識を高めている。しかし、高校生になると、地域の行事にボランティアとして参加することはあっても、地域を支える大切な祭や様々な行事に参加しにくいという状況がある。広域から生徒が集まってきていることもあるが、地域性が薄れてきている。地域が必要とする人材として、普通科で学んだ生徒が将来的に地域に戻り、学んだ教育を生かせる職場に就職しているかというところはなっていない気がする。

「我が母校がなくなっては困る。」という意味合いで一生懸命に反対運動をしている方がいるが、「ではあなたの子どもや孫の進路はどうなのか。」と聞くと、「できれば偏差値の高い高校に行かせたい。」となるなどかみ合わない議論になる。これが現実だと思っている。

地域に貢献する人材の育成や生徒たちが帰ってきたいという思いを強くするような高校教育であってほしい。そのための学校の在り方について、もう少し議論が必要ではないか。生徒数は減っていくのだから、何かの形で変えていかなければならない。これから大学などを受験し、社会に出て行く子どもたちに競争力をつけていくという観点からも、高校にある程度の生徒数は絶対に必要である。文部科学省が設定している8学級とまではいかないにしても3・4学級、100～150人規模は必要だと思うし、そうするためにはどうしていくのかということの議論があっても良い。学舎制も大事だと思うが、交通手段をしっかりと整えていかないと、教員が指導する以外の管理面に時間を割かなければならなくなる。さらに議論を深めていく部分はあると思う。

この地域にこれから必要とされる人材として、地域の産業を支える、あるいは、この地域で学んで他地域で活躍する人材を育成する観光や福祉、農業、漁業などの専門的な学科があってしかるべきであり、この点についても議論を深める必要

がある。

- 府教委からも高校にはある一定の生徒数が必要であると説明があった。例えば、資料の3頁「教育課程上の影響」にあるように、3学級の場合、芸術教科には2名しか教員が配置されず、美術・書道・音楽のうち2つしか科目を置くことができない状況が生じる。地歴・公民や理科についても、例えば、物理・地学・化学・生物のうち3科目しか置けない。3学級規模では専門性の高い教科において厳しい状況になることを御理解いただきたいし、現在、週あたり34時間授業を実施している学校もあるが、それも実施しにくくなるという状況が生じるということをご理解いただければと思う。

先ほども、一定の生徒数が必ず必要だとの意見があったが、重要な観点だと思っている。6月4日に文部科学省が、部活動に休養日を提言するとして、中学校や高校に改善を促す、という報道があった。顧問である教員の負担軽減や生徒の健康を保つという観点での提言とのことだが、2014年の国際調査では、日本は対象国平均の3倍の部活動を顧問が行っているとあった。現状でもそういうことが生じているわけで、今後、生徒数が減る中で部活動を維持していこうとすると、教員に今以上の負担をお願いすることになる。それを解消しようとするれば部活動数を減らす必要がある。そうしたことからキャンパス化という考え方が出てきたのだと思うが、各校の特色を出していきながら再編を図るということだと思っている。

キャンパス化したからといって、すぐにA校・B校の生徒の交流ができるわけではない。例えば、16時30分に7時間目が終わった後に学舎を移動して部活動をするということは現実的ではないと思うが、日常的には各学舎で練習し、土・日曜日のどちらかで合同練習をするなど、それぞれの特色をはっきりさせながら、さらに教育力を向上させていくという観点で今から検討していく必要があると思っている。

地域を支える人材についてだが、最近は様々なところから提案をいただき、かなり連携ができつつあるのではないかとと思っている。高校と地域とのつながりについてはさらに強化していくために、工業科などの専門学科の生徒だけではなく、すべての生徒が地元の企業でインターンシップをしてはどうかという提案もいただいております、検討しているところである。再編とは少し別の観点として、そうした取組を進めることは大切だと考えている。

高校には一定の生徒数が必要だが、一方で中学校時に不登校であったり、様々な環境の中で学習につまずきのある生徒もいるので、そうした生徒に対して、ゆとりと学ぶ柔軟な教育システムを提供するという学校を整備し、教育を保障をしていく必要もある。

- 小学校は小学校、中学校は中学校の教育課題があるし、高校は高校としてその後社会につなげる、あるいは上級学校に繋げていくという課題がある。その目標を達成するためには、ある一定の規模の中で生徒を育てる必要がある。

教科の専門性をしっかりと教えるためのスタッフを揃えるという点からも、学校規模はとても重要な問題である。どの高校も小さくなってしまっただけでは困る。様々な場所で活躍できる人材、もちろん地域の将来を担う人材やそれぞれの夢を叶える力のある人材の育成が高校には求められると思うし、可能性を掴むことがないように環境整備をしていくことが私たちに求められるところだと思う。

同時に、これまでもそうだったが、高校といえども地域の応援や力添えがないと立ちゆかない部分がある。地域連携として様々な形で応援をいただいている。これまで培ってきた伝統も背中を押してくれている。そうしたことが現在の教育に役立っているということも踏まえながら、今後の若い世代をいかに育てるかということを検討してもらいたい。

- 加悦谷高校は、現在3学級規模であり、地歴・公民の教員が3名、理科も3名いるが、将来的に2学級規模になると、両教科とも各2名の教員配置となることも考えられる。高校においては、例えば、地歴・公民には日本史、世界史、地理、政治経済、倫理といった小科目があるが、本来の専門以外の教員が担当せざるをえないことになる。理科の物理、化学、生物、地学の4分野についても、あまり経験のない小科目を担当する必要があるが生じる。そのため、個々の生徒に、難関校も含め、大学に進学できるだけの学力をつけることが困難な状況が生じてくると予想される。

また、今年度の入学生について、団体競技の部活動に入部する生徒はそれぞれ数名ずつという状況にある。今後さらに生徒数が減ってくれば、団体競技の部活動の存続は非常に厳しくなると予想される。小規模校の学力向上あるいは部活動の充実といった観点から、学舎制もやむを得ないのではないかと思う。伝統や地域に根ざした学校活動や教育活動、あるいは、設置時における地元の方々の支援といったことは非常に重いものがあり、大変心苦しいところではあるが、教育内容のことを考えるとやむを得ないと考えているところである。

- 昨日、小中高連絡協議会が開催され、小学校・中学校・高校の校長が一堂に会し、様々な取組について連携したところである。その中で、小・中学校の連携については一定交流が進んでいるが、今後は高校も含めて連携を進めていく必要があるという話が出た。網野高校について言えば、かなり連携した取組は活発で、小・中学校と双方向の連携ができつつあるし、今後もさらに進めていかなければならないと思っている。

また、本校の企画経営科では、日帰りツアーを企画するなど、様々な面で観光振興に一役買わせてもらっており、そうした取組を通じて生徒も成長しており、地域・小・中・高校との連携はかなりとれつつあると思っている。

また、現在本校は1学年4学級だが、さらに生徒数が減ると部活動においてチームゲームができなくなると危惧している。そうしたことも踏まえて、いろいろと地域的な状況はありつつも学舎制の導入が示されているわけだが、学校間の距離や交通の利便性の問題など、検討すべき事項はかなりある。様々な面において、生徒たちが交流しやすいような環境整備をお願いしたい。

教職員数がある程度確保できるという点では、小規模単独校よりも学舎制の方が有効だと思っている。ただし、生徒の交流に関しては、繰り返しになるが、交流しやすい環境づくりを検討していく必要がある。

- 保護者というよりも一市民として考えを述べたい。現在、小・中学校の統廃合も盛んに行われているが、高校もほぼ同じことなのだろうと思っている。人口が減る中で、従来の上までは未来にわたって学校を維持することは困難である。5年、10年、20年後を見据えれば、高校の再編もやむを得ないことだと思っている。

その際、問題となるのは交通手段である。通学バスの充実といったことが課題になると思う。丹後地域には現在2市2町あるが、将来は1市にする方向で検討すべきではないか。そうしたコストの縮減によって、通学の課題解消に向けた経費を十分捻出できるのではないかと思うので、5年、10年、20年後を見据えて検討すべきである。

○ 三つの道が示されているが、私としてはⅡ案だと思っていたので、学舎制という提案は意外であった。今後の流れでも変わるかと思うが、今後、10年、20年先の将来を見据えて考えると、子どもたちの交流ということが一番に考えることが大切である。また、「教育内容の充実」と「教育活動の継承」の果たしてどちらが大切なのかと言え、やはり「教育内容の充実」であると思う。

1、2回目の懇話会では、この地域に根ざした学科の設置についても多くの意見が出されており、そうしたことも踏まえるとⅡ案だと思っていた。自宅が網野高校の通学路にあるので、毎朝子どもたちが通っている姿を見ながらすごく楽しく思っているのだが、学舎制になった場合、「分校と学舎の違いは何か。」という気持ちに子どもはなると思う。簡単に言えば、例えば、もしも、峰山高校網野学舎、峰山高校久美浜学舎と名前がついた場合、子どもたちとしては、「え、分校？」と思うのではないか。また、受検する際には、「やっぱり私は峰山高校本校を受検したい。第2希望は網野学舎かな。」というように、今とは違う意味での悩みが出てくると思う。受検に際しての子どもたちの気持ちをどのように考えて学舎制になったのか。その点は疑問である。

京丹後市も合併して12年経った。人口格差がある中で、当時の町長さん方が「格差はあるが一緒になろう」として合併を進められ、今では本当に良い意味で京丹後市として頑張っている。京丹後市内においても中学校・小学校の統廃合が進められ、近隣の網野中学校も橘中学校と一つになり、新しい網野中学校となった。網野中学校の校長とよく話をするのだが、「橘中から来た子たちもすごく良い笑顔で頑張っている。」と聞く。そうしたこともあり、個人的にはⅡ案だと思っていた。

受検における子どもたちの気持ちを考えた上での学舎制なのか。また、子どもたちはどのような交流ができるのかということなどを聞かせてもらいたい。

◆ 分校と学舎の違いであるが、国の法体系の中には学舎という位置づけはない。2つの高校を対等に1つの高校として運営していく方法として都道府県で考え出されてきたものである。したがって、どちらかの学舎にいわゆる本部機能を置く形になる。校長室はどちらにもあり、校長は両学舎をしっかりと管理する。学舎にはそれぞれ副校長を配置する。

遠隔授業や補習授業などを合同で行ったり、教員が今日はこちらの学舎で指導、この曜日は別の学舎で指導するなど、専門性の高い教員が両学舎で指導することもできる。そういう意味では対等のものであると捉えている。

また、受検時にどちらの学舎を受検するかという悩みが出てくるとは思うが、いろいろと工夫の仕方はあると思う。例えば、一つの学舎には普通科、別の学舎には専門学科を置く。あるいは、同じ普通科を置くが教育内容を特色化して異なるコースを置く。その上で、その学舎における特色ある教育内容を選んで受検するという選択をしてもらえればと考えている。

子どもたちの交流についてであるが、丹後地域の高校は距離的に数kmから10数km離れているので、1時間目はこちらの学舎で学んで、2時間目は別の学舎に行くといったことはできない。また、部活動についても、毎日どちらかの学舎に行って合同で練習するというのも難しいと思う。先ほども御意見がでていたように、公共交通機関などしっかりと協議しながら、何らかの移動手段を確保する。例えば、学校でバスを用意して、ある曜日は一緒に練習する。野球部であれば、日々はピッ

チングやバッティング、キャッチボールなどの練習をしておいて、合同チームで試合に出場する。試合前には週休日などを活用して、集中的に合同練習するといったこともできる。

また、一人の校長のもと、共通の学校運営方針のもとで、それぞれの学舎の伝統や文化、特色を生かした学校経営ができると思う。現に、京都八幡高校においてはそうした学校運営を行っている。

イメージを持っていただくために、少し踏み込んだことを申しあげる。学舎制をどこの高校に導入するのかということについては、今の段階で府教育委員会として決めつけていくこともできないと考えている。これこそ皆様の御意見や保護者、地域の方々の御意見をお聞きしながら考えていかなければならないが、丹後地域全体を見る中で、中学生数や進路希望の動向、通学条件、地域のバランスなどを総合的に考えると、現段階での候補としては、一つは宮津・与謝地域。具体的には、宮津高校と加悦谷高校を一つのグループとして考えられないか。また、京丹後地域には峰山高校、網野高校、久美浜高校があるが、このうち峰山高校については弥栄分校を創造的に柔軟な教育システムによる分校とするため、峰山高校として分校の運営にも責任を持たなければならない。その点も考え合わせると、網野高校と久美浜高校が一つの候補として考えられると思っている。現時点での府教育委員会としての検討の途中経過であり、御意見を十分にお聞きしながらさらに詰めていく課題であると思っている。

◇ 府教育委員会の基本的な考え方に対して、賛成の御意見だけではなく、統廃合をしてはどうかといった御意見も先ほどいただいた。それぞれの思いを率直に聞かせていただき、今後検討していきたいと考えているので、その点はこだわらずに意見をいただきたい。

○ 一保護者の思いとしては、高校に入学して、部活動や勉強において充実した生活を子どもたちに送ってもらいたいが、現実には、通学の問題などで志望する高校をあきらめて、通学できる範囲の学校に行く。無理をして遠い学校に行っても部活動を続けていくことができないなどといった現状がある。統合などにより近くに希望する学科がなくなると、子どもたちにはとても負担になるが、とはいえ、小規模になることによって希望進路に応じたコースの設定や選択科目の開講が行われな可能性はあるということは、大変問題であると思う。

中学校を卒業する時に、将来これになりたいと決めている子どもはわずかだと思う。高校に入学してから様々なことを学び、「こういう方向に進みたい。」と思った時に、受けたい授業が受けられない。それによって大学受験に必要な科目が受講できなくなるといったことでは困る。そのことも十分に検討してもらいたい。

○ 与謝野町では、現在、意見交換会という形で、各界の代表者から高校の在り方についての意見を求めているところであり、その声を踏まえて町の総意としてまとめていきたいと思っている。

地域の活性化という面からも、高校がなくなることについては懸念する。また、交通の利便性等々を考える中、丹後地域に住んでいるからといって、将来の希望する進路に進めないといった、不利にならないようにしていただきたいと思っている。

私は、元教員なので、いわゆる教育の質の問題や生徒数・教員数の問題については一定理解できるが、町民には理解しにくいのではないかと。例えば、芸術系統の教員が配置できなくなるとか、教科指導の教員が少なくなり指導が不十分になるということを示してもらっても、なかなか具体的にはイメージしにくいところがある。

百聞は一見にしかずということもあり、先ほど先進事例としてあげられた岡山県の高校などにも視察見学してみても良いのではないかと考えている。

9月を目途に方向性を示すということだが、もう少し時間を取って、キャンパスで、何をどのようにしていくのかといったことについて各地域で意見を聞く機会があっても良いのではないかと。

- 目的意識を持つ、視野を広げる、といった教育を小・中学校で行って高校に送り出すことによって、子どもたちの個性や能力を最大限伸ばす高校教育につながればと常々思っている。

京丹後市においては小中一貫教育が全面実施されており、峰山中学校区は今年度で完全実施後3年目を迎える。子どもたちが先の見通しや次に進学する学校のイメージを描くことによって、今の行動の在り方や、今まで持っていなかった中学校のイメージなどをしっかりと持つ子どもが育ってきていると感じている。具体的には、例えば、部活動を体験する機会が年何回かあり、小学校6年生が参加している。この6月には、峰山中学校区のすべての6年生が中学校に行き、中学校の先生から授業を受けるといった体験授業が数多く実施される。多くの子どもたちから、「早く中学校に行きたい。」「中学校のあの先生に早く教えてほしいと思う。」といった感想を聞いている。

このように、子どもたちに先の姿をはっきりと見せることで、子どもたちの目的意識が明確になるといった大きな教育の効果を挙げている。小学校教育の現場において、こうした観点で子どもたちを育て、中学校・高校に送ることで、子どもたちの力を最大限伸ばすしくみや教育内容につながればと考えている。

京丹後市の地域の方や保護者の方からは、「当初、学校の再配置について反対意見なども多かったが、実際にやってみると大変大きな効果があるとわかった。在り方を変える時には否定的な意見や反対意見など様々な意見が出てくるが、今の状況をしっかりと考えて、将来にわたってこれでいけるんだという大胆な、もしくはいろいろ工夫をした考え方を持って高校の在り方については考えてほしい。」というような御意見も直接お聞きしている。

小学校の立場としても、丹後地域において、小・中・高校が一緒になってしっかりと子どもを育てていくという点において努力をしていきたいと考えている。

- 現段階での案という前提のもとではあるが、学舎制というベクトルを示してもらった。小学校教育の立場では、専門性の高い高等学校教育の制度や課題などについてイメージを持ちにくいところはあるが、現在の与謝地域の小学校における喫緊の課題である貧困問題について述べておきたい。このことは小学校段階においても非常に大きな課題である。府北部に位置する市町は、一軒あたりの年間所得が府内市町のうち24位前後に位置している。1位の精華町と比べると、年間所得において120万から130万円、場合によっては140万円程の差が生じている。そうした困難な家庭状況を背景としながら、小学校に毎日一生懸命通ってくる子どもたちの中には、小学校であればこそ学校給食があるのでバランスの良い食事がとれているという子どもも多い。負のスパイラルというイメージが、現実的に強く学校の中で感じられる。負のスパイラルを断ち切っていくためには、学力をしっかりと身につけさせ、将来の目標をしっかりと見据えて、自分の進みたい道、いわゆる自己実現ができる環境をつくるのが喫緊の課題であると捉えて、日々の教育実践を積み上げているとこ

ろである。

小学校にも進路指導という言葉は校務分掌上あるが、子どもたちの貧困を背景とする様々な課題等々を考慮すると、義務教育9年間と、さらにほぼ全ての子どもが高校に進学するという視界に入れて、しっかりと社会的に自立させるための生きる力を小学校段階から身につけさせ、さらには学びの連続性を確かなものにつなぐということを見据えた教育内容を考えていかなければならないと日々とらまえているところである。

本日提示された三つの道のベクトルについてだが、困難な状況を背景にした子どもたちが、地域の最高教育機関である高校において、自分自身の可能性をしっかりと大きく膨らましていけるような環境となるようぜひお願いしたい。

通学事情については個人差や地域的な差もあると思うが、かなり大きな負担感が家庭にのしかかっていくことは間違いないので、学舎制が家庭や子どもたちの将来目標に対してプラスの方向で、また家庭的な負担感を小さくする方向での教育環境の整備につながることを切に願っている。

- 方向性を示してもらったので、話がしやすくなったと感じているが、丹後地域の交通事情のことが非常に気になった。生徒間の交流を活発にするといっても、あるキャンパスからあるキャンパスへ生徒が移動する際にはどうするのか。移動は難しいのではないか。また、教員がA学舎とB学舎に日替わりで行く、あるいは一日の途中で移動するという場合はどうなのか。

中学校においても、いわゆる小規模校では部活動において団体チームが組めないため合同チームをつくっている。月曜日から金曜日までは各校で練習しておいて、土・日曜日に合同練習を行っている学校が多いと思うが、なかなかうまくいっていないという話も聞く。

- 中学校は高校進学に直面しているので、今後の計画について早く知りたいという思いが強い。

先ほど、高校では生徒が減少することによって教育活動がものすごくやりづらくなるという話があった。本校も2学級なので、教員数が少なくなると十分な教育活動が行いづらくなるということは十分理解できる。教員が一定数いることによって、学力を向上させることもできるだろうし、高校で言えば、大学進学についても力を入れることができるのだろうということも、学校現場の立場としては良く分かる。また、教員が少なければ顧問になる教員も少なくなるので、部活動等の活性化や特別活動全体の活性化という面でも課題が生じてくると思っている。

方向性としては、提起されたように、現状維持をするか、なくすか、なくさずに何かを考えるかという大きくこの3つの考えに納まるのだろうと思う。キャンパス化して具体的にどのようにしていくかについては、まだまだこれからの話だとは思いますが、具体的に示してもらえれば提示してもらいたい。中学校現場としては、今後の見通しをできるだけ早く示してもらえるとありがたい。

- ◇ 関連して、事前にいただいている御意見を紹介する。

- ・ 今後の見通しを明確にしていくことが必要。
- ・ 将来にわたり、これでいけるというような計画を立てるべきではないか。今後の生徒数を踏まえれば、Ⅱの統廃合も視野に入れて考えておかないと、数年後に再度計画を見直すようなことになるといった変化が起きるのではないか。
- ・ 分校が弥栄分校の校地に統合された場合、交通の便を考えると伊根町から弥栄分校までは通いにくい。どのように通学を確保していくのか。あるいは、分教室のようなものを宮津・与謝地域につくるということも検討してほしい。

- ◆ 府教育委員会としても、純粋な教育論として、一定の学校規模を確保するという点ではⅡ案だと思っている。ただ、これまでの御意見の中には、通学できる範囲で教育を受けられるようにしてほしいという御意見や経済的負担に配慮してほしいという御意見があった。また、何よりも、それぞれの学校がその地域で果たしてきた歴史がある。なお、Ⅱ案には「教育内容の充実を図る」、Ⅲ案には「教育活動を継承」と記載しているが、Ⅱ案においても教育活動の継承は行うし、Ⅲ案においても教育内容の充実は行っていく。わかりやすくするために異なる表現で記載しているので、その点をご理解いただきたい。

先ほど、学舎制にして生徒の交流ができるのか。教員も大変ではないか、という御意見もいただいたが、先ほども触れたように、バスなどの移動手段を確保しないと現実的にはかなり厳しいと思っている。学舎制を追求するにあたっては、そのことも同時並行で検討していかなければならないと思っている。ただし、移動手段を確保したとしても、日々の交流はなかなか難しい。教員が移動することも含め、それぞれの学舎でどれだけ充実した内容を展開するかということについて、しっかりと追求しなければならぬと思っている。

また、先ほど年次計画についても御意見があったが、現在このような形で皆様から御意見をお聞きしており、また今後、保護者の方々の御意見も聞いていきたいと考えている。8月から9月には何らかのプランをお示しするとしているが、皆様の御理解を得てこそプランとして固まるわけである。したがって、まだまだこれから議論は続くと思っている。8月から9月には方向性の大綱的な部分をお示しすることになるかと思う。

具体的にはその時点から詳細の準備に入ることになるので、平成31年、32年頃に学舎制の新しい体制で本格始動するというイメージだと思っているが、議論の進捗状況からして、具体の年次については現時点では特定できない。どういう教育環境を準備するかによっては施設整備の必要性も生じてくるし、そうなれば予算も確保しなければならない。今夏はまず大きな方向性について、皆様にお示ししたいという思いで進めている。

- 今の点については、私もお願いしたいと思っていた。もしこの学舎制で落ち着くのであれば、学校間の擦り合わせやどのような特徴を持たせるのかということが非常に大きな問題になってくる。一定の方向が出てから学校での審議の時間を十分にとってもらいたい。

- 方向性をしっかりと示してもらったことで、非常に議論がしやすくなった。冒頭にあったように、学校には生徒たちに様々な学力をつける。学力の向上という使命がある。府教委の説明にも、学校の指導力・教育力の向上を目指して高校の今後の在り方を検討する、とあったと思うが、大筋それに対して反論をする気はない。このまま子どもたちが減っていく中で、生徒の学力が維持できるのかという意見もあったが、かなり難しいと感じている。

私としては、学舎制の有り様ということあまりイメージしていなかった。Ⅱであろうと思っていた。先ほども意見が出ていたが、学舎制の場合、2つの学舎間でのすりあわせが非常にしにくいのではないかと危惧する。10年ほど綾部高校に勤務していたが、当時、本校・分校間で教育の方向性などを合わせていくために、様々な教育活動を一緒に行うという取組をしていた。結論から言えばとてもしんどかった。本校と東分校間はたった3kmしか離れていないが、それでも生徒たちの移動はつらいものがあった。学舎化することによって、現場の教員も子どもたちもかなりしんどい思いをするのではないかとと思われる。

私は再編ありきで話をしているので、それには反対だという方もいると思うが、先ほどからも話が出ているように、長い将来にわたって、こういう形にして良かったという再編を行う必要があると考えている。「子どもたちも先生たちもとても苦

労しているではないか。」「再編したが後々もう一度再編しなおさないといけない。」ということでは意味がない。

- 本校は圏域唯一の特別支援学校であり、すべての子どもたちがスクールバスで通ってきている。遠い子は1時間を超える。小学部1年生でも毎日バスで通学している。物理的にはなかなか疲労感も大きいと思っているところである。

本校は、特別支援学校としての機能をこの圏域で十分に発揮していく形でありたいと考えている。特別支援学校としての教育内容にしっかりと取り組んでいきたい。50年近く経つ校舎の老朽化の問題や防災面でも差し迫った課題もある中、いろいろな側面で、本校の在り方についても考えているところである。

先ほど分校について、京都フレックス学園構想が示された。その点では有機的・効果的な関連性も持っていくということも、特別支援学校の在り方としてはあると考えている。また、老朽化とも関連して、今の場所で改築するのか、違う場所に移るのかによって、学校そのものの在り方も大きく転換していく。直接ではないが、府立高校の再編が大きく影響してくると考えている。以前に、京都八幡高校と南キャンパスの話があった際に、南キャンパスに併設されている八幡支援学校のことも話題になったと思うが、そうしたこともイメージすると、併設校になった場合ができること。あるいは今の学校だからできることなど、様々なバランスを考えていきたいと思っており、そのあたりも構想の中に含んだ形で検討してもらいたいと思っている。よりよい形で、この渦の中にいたいという思いである。

- 単独校での存続は難しいと思うので、地域性や各学校の歴史などを考えると、次のステップとしてはこのキャンパス化という線なのかと思う。ただし、大学のキャンパスなどは、例えば、理工学部はどこのキャンパスに持っていくというようにははっきりしている。高校をキャンパス化する場合に、例えば、何々キャンパスにも普通科があり、専門学科がありという形であるならば、Ⅰの単独校維持と変わらない。Ⅲの道を取るのであれば、丹後地域全体を見て、普通科をどこに配置し、専門学科をどこに配置するというようにデザインしないと再編とは言えないのではないか。

本校は私学なので、小規模な学校としての課題である教員の配置の問題や部活動の活性化などに目をつむり、継続していく方向性を取っているが、公立高校については、ある程度の規模が必要ということ踏まえ、丹後地域の中での配置を検討してもらえればと思っている。

- 府北部地域の地域振興が重要な時代となり、その地域振興は経済産業力にとっても密接に関係し、それを支えるのが教育だという観点から意見を述べたい。

以前、人を伸ばす原理について発言したが、高校生で伸びる、伸ばすということをも重視するとするならば、一定規模の生徒がいて、その中で、部活動でも勉強でも良いので、何かに主体的に頑張るといふ動機を与え、そして自分の身近にいる良きライバルを意識しながら切磋琢磨して頑張る。あるいは、部活動であれば、地域の中で勝とうという高い目標を持って頑張ることで人は伸びると思う。そのためには一定の規模、生徒数が必要である。

三つの道のうち、Ⅰは教育としての人を育てる成果という点では厳しい。本来ならⅡだと思う。各地域に学校がなくなるエリアができるという課題はある。また、保護者の立場からすると、交通費の負担が大きくなる。ただし、府の支援策として通学費を無償にするなど、金銭的負担については解決する道はあると思う。府全体に大きく影響することになるだろうが、北部地域は過疎、そして交通網の状況が南部地域と全く違うので、そのあたりに注目すれば解決する可能性はある。ただし、通学時間については厳しい。JRやバスの運行会社に朝と夕方の本数などを調整してもらおうぐらいしか難しい。そうしたいいくつかの問題はあるが、Ⅱについても問題

を解決する対処策はある程度あるのではないか。

Ⅲについては、Ⅰに比べれば間違いなく良いのだと思うが、意欲がない生徒たちもいる中で、ICTなども活用するのだろうが、どう成果に結びつけるのかということには課題があると思う。確かに広がる可能性はあると感じるが、その一方、すべての面で課題もある。長所と短所が同時にあり、短所についても心配な要素が多くありそうな感じがしている。

教育の成果として、生徒が頑張る中で、人間力を育成するような環境を整備することが、北部地域の振興につながると思っている。

- どうすれば地域も含めて丹後地域は良くなっていくのだろうかと思いつつ御意見を聞いていた。課題やリスク、学校現場としての思いも理解できる。子どもたちにどのような教育を与えていくのかということや地域の産業の課題、人口減少。子どもたちがいない現実をつくってしまっているということを一人の親として感じているところであるし、Ⅱ案にしても、Ⅲ案にしても、良いところもあり、悪いところもあると感じている。

農業関係者としては、学舎制になることで、専門的な学びが集中してできるのは良いことだと思う。府内にある農芸高校や農業科設置校から先生に来てもらうことも考えられる。子どもたちを育てる意味でも、様々な先生方の交流が行われることも大切になってきているのではないかと思う。

子どもたちをどのように守り、育てていくのかということについて議論しながら、しっかりと統合・再配置に向けての議論ができればと感じたところである。

- 人口が急激に減っていくことは避けては通れない事実であり、それに基づいてどういう高校の在り方が良いのかを考えていくことが、我々に一番求められていることだろうと思っている。

高校の在り方として統廃合していくのかということについて議論が集中していることについては、それはそれで当然必要なことだと思う。しかし、「地域の高校をより魅力ある学校にするために」という懇話会としての大きなテーマがあったと思う。高校の魅力、地域創生における高等学校の役割、学科の在り方、部活動の在り方、生徒の多様な学びの保障、望ましい学校規模。そうした中の一つとして本日は望ましい学校規模について議論されているわけだが、本来的な在り方として、高校教育において子どもたちに何が一番必要なのか。少子高齢化の中にあっては、行政の問題があるだろうし、産業界として今まで子どもたちが帰ってこれる素地をつくれなかったという大きな問題もあると思う。当然、我々の企業体の中でも反省しなければならない点だろうと思うが、子どもたちが帰ってきたくなる素地を小学校や中学校は当然だが、高校生にどのように学校で指導するかという学校教育の在り方についても議論すべきである。統廃合はあってしかるべきだろうと思うが、子どもたちに対して“将来的に帰ってきたくなる地域”について、しっかりと教育してもらいたい。

私も行政経験があり、市町合併の時に旗を振った人間だが、基本的には統廃合すべきだと思う。ただし、教員にとっては職場が減ることにもなる。先ほどから小規模校になると教員数が減り、子どもたちに十分な教育ができない恐れがあるという話が出ている。国において学校の教員数が決まっているのだろうと思うが、府教委は府教委として、たとえ学校の生徒数が減ってきて、ある程度の教員数は確保していく体制をとってもらいたい。小規模校になれば教員数も減って随分と厳しい状況になるので進学にも就職にも弊害が及ぶという議論もあったと思うが、府教委として対処し、仮に統廃合をしてもその後もさらに子どもの数が減っていくはずなので、学校規模が縮小していても子どもの教育は保障するという姿勢を明確にする必要が今の段階であるのではないか。

- 資料に、想定される小規模化の課題があるが、京丹後市の学校再編を進めてきた立場から言うと、市内の小・中学校と広域な高校で質は違うが、よく似た感じだと思っている。単に生徒数だけを基にした再編統合はしない、丹後地域における通学事情を考慮する、小規模の課題をできる限り解消する、という考えのもと、三つの案が考えられたのだと思う。

子どもの数が減っていく。減らなくても小規模の高校への志願率は低くなっていく傾向があるので、専門性を大切にした特色ある学科をどのようにつくるかということが大きな課題だと思う。他地域からも進学したいと思われるような学科ができるのかどうかという点がわかりにくいところである。

I 案の欄に、今後の募集定員の推計が示されており、久美浜高校を例にとると、平成39年度選抜では50名とある。しかし、本当に50名でいけるのか。丹後鉄道に乗っていると、久美浜駅、神野駅、網野駅などから峰山方面に向かう生徒や宮津方面に向かう生徒がかなりいる。先日も市教委の職員が、「こんなに大勢、峰山・宮津方面に向かって行くのか。」と驚いていた。そうした中で、久美浜方面に向かう生徒がどれくらい出てくるか。専門性を活かした本当に面白いなと思えるようなコースをぜひ考えてほしい。

例えば久美浜高校と網野高校を学舎制にした場合、学舎間でどのような生徒の交流ができるのか。おそらく学ぶ学科が異なれば、行事ぐらいいかないのではないかとも思う。生徒の交流や専門性のある教員の交流について、もう少し具体的に示してもらいたい。学科についても、網野高校に何学科ができて、峰山高校には何学科ができるのかといったことがわからない。学舎制は良いとは思いますが、そうした点ももう少し明確にしないと話題に深く入りにくいところがある気がする。

- 10年後には5、6学級の高校が2校あれば十分生徒を収容していけるとのことであるが、そうした中で一番考えておかなければならないことは、10年後にしっかりとこの地域から大学等に進学していく高校生の学びの質や学ぶための環境を本当に確保していけるのかということである。また、教育を受ける機会やどの地域からも通学できる機会を与えていけるのかといった点については、市町の立場としてしっかりと応援していかなければならないのではないかとと思っている。

こうした集約した形になってくると、学びの質という意味では充実していくことができるのではないかと思うし、またそうしていかないと他地域の生徒たちに負けていくのではないか。生徒が伸びていくためには高校を集約することも必要ではないかと思っている。市町の垣根を越えて、広域な視点で丹後地域全体の人材育成について考えていく必要があるのではないかと思う。

高校が近くにあることは良いことだが、遠方から通学する場合には地域全体として、2市2町として応援をしていくといったことも考えていく必要があるのではないか。少ない生徒にしっかりと教育を受けてもらうことができるようにするために、今後、2市2町で連携して考えていく必要がある。キャンパス化だけではなく、基本のところから議論を深めていくべきではないかと思っている。

- 今後のスケジュールとして、7月を目途に計5ヶ所で、主に小・中学生の保護者を対象に公聴会を行うということだが、先ほども意見があったように、本市においては小・中学校や保育所の再配置を行ってきた。その中で感じたことは、保護者と地域は違うということである。保護者は、生徒数が少なくなるところではなく、きちんとしたところで学ばせたいという意見をお持ちだが、地域の方々は、今まであった学校や保育所がなくなることに対して納得できない、という思いを持っておられる。したがって、保護者だけではなく、何かの機会に、地域の方、特に同窓生の方などにも考え方を伝え、説明してもらいたい。

また、再配置をした経験から言えば、例えば、学舎制にした場合の校名をどうするのかということが気になる。小・中学校の再配置をした際、例えば、この学校に

吸収される、あるいは統合されるというイメージを保護者の方は嫌がられた。2つの学校を統合し、名前を変えて新しい学校をつくっていくというイメージで進めていく。最終的には以前と同じ学校名になったところもあるが、保護者や卒業生は学校の名前がなくなることに大きな抵抗があり、名前を統一することが非常に難しかった。その際に、新しい学校の名前にする。新しい校歌をつくる。新しい校章をつくる、ということで、委員会を立ち上げてじっくり時間をかけて進めたという経過があるので、そうしたことも一つの考え方としてもらいたい。

結論としては、Ⅱ案かⅢ案になるだろうとは思いますが、時期をどうするのか。例えば、小・中学校を再編する際には、こういう良いことに取り組んでいく。小中一貫教育をこのように進めていくということを示してきた。ぼんやりとした形では地域の方や保護者の方も判断がつきにくいのではないかと。時間をかけて検討するというのであれば、少し時間をとった方が良いのではないかと。いつから、どこで、どのような特色を出していくのかということをもう少し打ち出さないと、地域や保護者の方から「わからない。」という声があがるのではないかとという気がする。もう少し検討する時間を持つことも考えてもらいたい。

- 日本全体が人口減少の方向に向かっていく中で、現在、国をあげて地域創生が提唱され、取組が進められているが、そうした中で高校生は、人口減少が見込まれるこの丹後地域を支えていく非常に大切な人材である。子どもたちがしっかりと学ぶことができる環境をいかにしてつくるか。そして、学力を身につけ、地域に戻ってきて、将来に向かって発展させていく人になってもらうという観点で取り組んでいっていただきたい。

いろいろと意見が出ていたが、長期的な視点にも立って考えていく必要があると思う。Ⅲの学舎制については、様々な想定がされているようなので、可能であればもう少し具体的なイメージがわくような資料を提示し、その上で意見を出し合って深めていく、判断の参考にしてもらうようにしてはどうか。

- どの学校にも果たすべき使命があるが、海洋高校については、京都府、近畿、日本の水産業の担い手育成と将来のスペシャリストの育成と明確であり、それをまっとうするために、教育の充実や発展があると思っている。本校の教育力の低下は京都の水産業の低迷につながる危険性があり、役割は重要であると自覚している。

府北部地域の生徒数減少の中で定員100名を充足するために、今まで以上に府南部地域や他府県の、海や魚が大好きだという生徒を獲得していきたいと考えている。本年度についても新たな広報活動に総力を挙げて取り組んでいる。現在、寮生が44名、下宿生が80名強と自宅外から通っている生徒が約半数強いるが、今後は地元の子どもの数が減るので、さらに自宅外通学生が増えると考えている。そのため、今回の再編を機に、寮の増築、または新築を強くお願いしたい。1ヶ月の寮費3万8千円に対し、下宿の場合は6万円から7万円とほぼ倍になる。貧困家庭の問題が注目されている中、この金額差は縮めていくべき大きな課題であると考えている。

現在は、確実に寮に入れるという確約ができないので、「寮に入れないのなら海洋高校への出願は見送る。」というケースが毎年生じている。また、下宿では教員の指導が及ばない時間帯が長いと、指導の徹底が難しいという課題もある。さらに、下宿生が学校に行きにくい状況になった場合に、下宿で一人にさせることが命に関わる危険な状況にもつながると危惧している。外部からの生徒数を増やすためにも、ぜひ寮の増築または新築をお願いしたい。

府水産業についてだが、府水産業に魅力を感じ、海の民学舎で生活をかけて研修に臨み、学んでいる方もいる。海の民学舎とは今後とも連携をとりながら、府水産業を盛り上げていきたいと考えている。

また、本校は年間を通して、市町各関係の方々、水産・海洋の関連機関、または専門機関の方々から大切にさせていただいており、生徒はそのことに心から感謝し、

自らの使命を子どもながらに自覚して、進むべき道を決めていっている。各学校ともそうだと思うが、地域、または関連機関、専門機関から包み込まれているという感覚は、高校の活性化や生徒の成長にとってとても重要である。そうした意味で、本校は本当に恵まれた教育環境にあると思っているところである。

今後も課された使命を貫き通し、また、中学生段階では将来の進路を見据えて高校選択をするのが難しいという声もあるが、本当にそれで良いのか。海洋高校としては“高校選びは人生選び”というメッセージを様々な場面で子どもたちに伝えており、今後も投げかけ続け、先を見据えて高校を選ぶ中学生を増やしたいと思っているし、選ばれる高校、3年間生徒がやりがいを感じ、たくましく成長する高校であり続けたいと思っている。

- 将来を見据えると統合した方が良いのではないかという意見もあるようだが、地域の皆さんの思いや各市町の思いなどを府教委でくみ取ってもらった結果がⅢ案なのだろうと理解させてもらいたいと思っている。

いずれにしても、皆さんからの意見にもあったように、子どもたちの将来のための高校であってほしいと思っており、その点については十分に協議してもらいたい。全体がうまくいくということにはなかなかならないのだろうが、できるだけ寄り添えるような在り方になってほしいと思っている。

- 分校については伊根分校と間人分校がなくなるということだが、この点についても丁寧に説明をしてもらいたい。

また、本市においても学校施設・保育施設の跡地活用にはとても困っている。間人分校についても耐震工事は行われていると思うので、跡地利用についても質問や意見が出てくると思われる。そのことも検討しておく必要があると考える。

[閉会あいさつ]

長時間、熱心にご協議いただき、また、私どもに貴重な御意見を賜ったことに感謝申し上げます。皆様からいただいた御意見は、いずれも今後検討を深める必要を感じさせられるもので、胸にしみている。

最後に海洋高校から専門学科設置校としての強いメッセージを述べられたが、これこそ教育内容の特色についてのメッセージであると受け止めている。本日は高校の枠組の話が中心であったため、教育内容をどうしていくのかということまでたどり着いていないが、今後、そのことも含めて検討していきたいと考えている。

また、市町から、これまでの経験上考えておくべきことについてもアドバイスをいただいた。そのこともしっかり踏まえて取り組んでいきたい。